福島原発事故後の復興に向けた今日までの進捗状況

小島周二,^{*,a} 井上浩義^b

Progress for the Revival after the Fukushima Nuclear Plant Accident to Date

Shuji Kojima^{*,a} and Hiroyoshi Inoue^b

^aDepartment of Radiation Biosciences, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Tokyo University of Science (TUS); 2641 Yamazaki, Noda, Chiba 278-8510, Japan; and ^bDepartment of Chemistry, Keio University School of Medicine; 4-1-1 Hiyoshi, Kohoku-ku, Yokohama 223-8521, Japan.

2011年3月11日に起きた東日本大震災に伴う福島第一原発事故以降、“放射線を正しく理解し、正しく怖がりましょう”というフレーズを見聞きしない日はなかった。原発事故発生に伴い、核反応により生成された放射性ヨード (^{131}I) やセシウム (^{134}Cs , ^{137}Cs) が風に乗り、主として東北・関東地方に飛散、その後の降雨により地上に落下、露地野菜や水道水等に混入、日常生活がパニックに陥る事態にまで至った。事故後、復興に向けて、汚染地区の特定、その後の除染等に国を挙げて今日まで対処し、既に2年を経過したが、今日でも放射性セシウムによる下水溝や野菜・魚介類の汚染が多くの人々に恐怖心を与えているのが現状である。

福島原発事故後の復興のためのこれまでの試みと今後の課題等を各分野のスペシャリストに提供して頂き、それらを受けて、医療を担う一員である薬剤師/薬学研究者である私達に何ができるか？ また、得られた成果をできるだけ早期に復興に生かしていくための取り組みについて参加の皆様と議論できる場としたいという思いから、本シンポジウムを

設定させて頂いた。

具体的には、5名のシンポジストに登壇頂き、1) 福島原発事故—残された健康リスクのアセスメントとコントロール (長崎大先端研 松田尚樹)、2) 福島原発事故後の陸域での放射性物質の環境動態 (筑波大 RI センター 古川 純)、3) 東電福島原発事故後の海洋での放射能汚染の推移 (気象研 青山道夫)、4) 低線量放射線の生体影響 (東京理大院薬学研究科 小島周二)、及び5) わが国での今後の放射線教育はどうあるべきか？ (慶應大 井上浩義) の各演題で、「復興の現状」、「陸地の除染と植物への放射性セシウムの移行」、「現在と今後の海洋と魚への汚染状況」、「人体の被ばく線量とその影響」、及び「現地での放射線教育の現状」等を各専門家に最新の状況を紹介して頂いた。しかしながら、講演時間の関係でカバーできなかった箇所も多々あったようだが、幸いにも本誌編集事務局より今回のシンポジウム内容に基づいた誌上シンポジウムの機会を与えられたので、各先生方にはその内容も含めて原稿をお願いした。

^a東京理科大学大学院薬学研究科 (〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641), ^b慶應義塾大学医学部化学教室 (〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1)

*e-mail: kjsma@rs.noda.tus.ac.jp

日本薬学会第 133 年会シンポジウム S30-301 序文